

障がい者が自立すれば、みんなが元気になれる

国にNO！を突き付けた岡山県総社市長の戦い（上）

坂之上 洋子：経営ストラテジスト

2014年04月24日

「政治」というと、「難しそう」「私には関係ない」「偉い人がなんとかしてくれる」と敬遠してしまいがち。しかし、今まで目を向けてこなかっただけで、当たり前だけれど、政治と私たちの生活はつながっている。経営ストラテジストで作家、そして1児の母でもある坂之上洋子さんが、「あまり知られていないけれど、実はいい政策」をフューチャーし、ビジネス目線、ママ目線、NPO目線で、素朴な疑問を明らかにしていく。

第1回目は、岡山県総社市長を務める、片岡聡一さん。



この子を総社市が迎え入れてくれるなら、つらい日々も泳ぎきれる

坂之上：市長は、障がい者をできるだけたくさん雇用しようと頑張っているじゃないですか。まず、そこから教えてください。

片岡：はい。でもね、障がい者雇用を市の「売り」にしちゃいけないって、よく思うんですよ。たとえばですよ、ここに3歳の女の子がふたりいて、この子は重度の障がい、この子は軽い障がいですと。あなたは、どっちかを引き取らなければいけません、と。どっち引き取ります？

坂之上：厳しい質問ですね……。ごめんなさい。自分は、軽い障がいの子を引き取るかもしれません。

片岡：でしょう。人間そうじゃないですか。障がいがある人に、毎日毎日、優しい気持ちばかりじゃいられない。そんなことすら認めながら、彼らが「生まれ育って、働いて、老いていく」ことができる仕組みをまず作って、これから先、誰が市長をやっても大丈夫のようにセットできたら、多くの人が救われると思っています。

僕の夢はね、障がい者の「人生の3段階」を、総社市で完成させることなんです。ファーストステージは「生まれて育ち、教育する」こと。セカンドステージは「就労、社会に出る」こと。そしてラストステージは、「老い、死んでいく」場を用意すること。

だからまず、障がい者を1000人雇用することを目標にした「障がい者千人雇用」っていうのを始めたんです。

坂之上：それはどういうことですか。

片岡：3年前、総社市には、知的、精神、身体に障がいのある方をすべて足すと、3152人の障がい者がいたんです。そのとき、「18歳から60歳の方のうち、働いてる人はいったい何人だ？」って職員に聞いたら、「180人だ」と。その頃、総社市にいる障がい者のうち、18～60歳の人数は1200人ぐらいでした。じゃあ、働いていない残りの1020人はどこにいるのか？ 実は、障がいを隠して、家でひっそりと暮らしていたんです。その残りの1000人を社会に呼び込んで、働いてもらおう、参加してもらおうと思って掲げたのが、「1000人を雇用する」ということだったんです。

だけど「1000人雇用するんだ！」と言ったら、職員がよってたかって、「殿、ご乱心」みたいに言う。

坂之上：殿、ご乱心（笑）。

片岡：そんなのできっこないって。できっこない理由を、ワーッと言われました。でも、それから3年で、721人まで就労できたわけですよ。

坂之上：す、すごい。

片岡：そうですね。「障がい者千人雇用」をやる前は、障がい者を持つ親が市役所にやって来て、さんざん文句言うわけ。やれ教室にスロープがないとか、先生がえこひいきをするとか、あの先生を変えろ、とか。そんなのばかりだったの。ところが「障がい者千人雇用」をやるようになって、就職できた障がい者の方が増えてきたら、親たちが僕にこう言ったんです。



片岡聡一（かたおか・そういち）

岡山県総社市長

1959 年生まれ。青山学院大学法学部 卒。1984 年、橋本龍太郎事務所入所。

内閣総理大臣公設第一秘書、行政改革・沖縄北方担当大臣大臣秘書官（内閣府へ勤務）などを経て、2007 年、総社市長に当選。

「市長さんね、あなた障がい者を子どもに持ったことないから、わからないと思いますけど、この子を学校に行かせるまでが、毎日、もう大変なんです。靴下は履けません。ご飯を食べてる途中で、急にてんかんで倒れたりもするし、グズグズグズグズ奇声を上げて、家の中で暴れまくって、ガラスを割ったりもします。家に帰ってきたら部屋の中で卵を投げて遊んでいて、家中卵だらけ。毎日、毎日、そういうことばかりです。朝、この子をバス停まで送っていったら、やれやれと思うんですけど、そんなつらい日々をどれだけ積み重ねても、どうせこの子は学校を卒業したら行くところがないし、社会は絶対、迎え入れてはくれない。そう思って途方にくれていました。だけど、この子たちが高等支援学校を卒業したら、総社市が本当に全員就職させてくれて迎え入れてくれるって、約束をしてくれた。——ああ、私、あそこまで泳いで行ったら、この子が生きて行ける場所がある。そう思うと毎

日が我慢できる」って言うんですよ。それを聞くと、よかったな、と思います。

坂之上：なんだか涙が出そうです。

障がい者が入社して、会社の団結力が上がった

坂之上：初めは企業側も「障がい者を雇うって、そんな……」って言いませんでしたか。

片岡：はい。企業は、絶対、採りませんでした。

坂之上：想像に難くないです。

片岡：企業は、最初はそんな足手まといを雇うよりも、罰金払ったほうがいい、なんて考えるのです。ところが、雇ってみるとだんだんわかってくるんですよ。彼らをひとり入れると、職場の団結力が上がるとか。

坂之上：そんなに効果が見えるのですか？

片岡：そう。それから社員が優しくなったりね。中の雰囲気は良くなる。で、だんだんだんだん、採る会社が増えてきて。

坂之上：採用した会社の様子を聞いたり、横で見たりして。

片岡：そうです。あんまりね、彼らに対してかわいそう、かわいそうじゃだめなんですよ。もっと普通に肩をぽんとたたいて、「働け」みたいにやってくれたほうがいいんです。障がいの「害」をひらがなで書かないといけないとかね。そういうもんじゃないと思います。彼らも頑張れよ、ぐらいのほうがうまくいくんです。僕ら総社市では、軽い知的障がいの子どもなら、普通に受け入れられるようになってきた。

坂之上：それは会社側が経験値を積んだからですね。

片岡：そう。頑張ったら彼らが納税者になる。それが総社市ではだんだん普通になってきました。

どの政治家も苦手なことを、総社市の得意技にしていきたい

坂之上：そもそも、なぜ障がい者雇用に取り組もうと思ったんですか？

片岡：全国には 813 の市があって、813 人の市長がいます。だけど全国の市長たちはほとんど障がい者を見ていません。市町村が見ているのは、小・中学校の中にある特別支援学級の子どもた

ちだけ。高等学校は「県」の仕事になってしまい、県立の特別支援学校になってしまう。だから、「市」は見て見ぬふりをしてきた。しかも、雇用の斡旋なんて、ほんとうは市町村がやってはいけないんです。仕事を紹介していいのは、国が運営しているハローワークだけ。僕ら市役所がやりたくても、やっちゃダメなんです。

だけど、障がい者の方々が実際に住んでいるのはここ、この市、総社市なんですよ。なのに、これまで僕らは障がい者を見てきませんでした。そこは深い反省に立たないといけません。

全国に 813 人の市長がいて、国会議員は衆参合わせて 700 人ぐらいいるでしょう。知事がいて、市会議員や地方議員もいて。政治をやっている彼らに、不得意な政策はなんですか、って聞いたら、たぶん、みんなほとんど同じことを答えると思います。それは障がい者雇用、買い物難民、農業、高齢者介護、それから外国人との共生。それぐらいのもんです。どの政治家も弱点だと思ってる分野を、うちの市が得意技に変えていきたいと思ったんです。実は、この 5 分野はどれも国がやるべきことなんですよ。



坂之上：ほんとうは国がやらなくちゃいけないことを、市でやろうという考えなんですね。

片岡：そうです。国の法律というのは「束ね」がでかすぎて。やっぱり、地元に近い僕らが動かないと、うまくいかない。今ね、障がい者は、全人口の4%ぐらいといわれています。僕らが残りの96%に生まれて来ることができたのは、彼らが、僕らが持つはずだった障がいを代わりに持って生まれてくれたからです。96%側に生まれてきた僕らは、4%の方々に、居場所を提供しないといけないと思うんですよ。

国は、「社員の何%は、障がい者を雇いなさい」みたいに、すぐ義務化するでしょ。そんなふうに形だけやるんじゃなくて、総社市では、企業が彼らを「戦力」として考えているんですよ。この市は、障がい者は貴重な戦力だと考える、そんな社会に変わり始めているのです。

僕らが1000人雇用を達成できたら、813ある市のうち、あちこちが「うちもやる」と、手を挙げるようになる。そうなったら、障がい者の居場所は絶対変わってくる。そう信じています。

それができたら、次は彼らが「老いていく」場所を整えたい。彼らは結婚できない人がほとんどです。けれど要介護にならないかぎり、特別養護老人ホームにも入れず、独り暮らしになってしまふんです。最後は人知れず独居死してしまう人が多い。だから、彼らが安心して老いていける住まいをつくらうと思っているんです。そこで、まず手始めにアパートに、2人ずつの部屋を3つ借りて、6人入居できるようにしました。それをオープンしたら、すぐに埋まった。

坂之上：その視点はありませんでした。親からしたら自分が先立って障がいのある子が独りで残る、それがいちばん心配なことですよ。

片岡：そうですね。生まれてから死んでいくまでを総社市で完結させることができたなら、お母さんたちに、もしも障がいのある子どもを授かったとしても、安心して生みなさい、って言える。そういう文化ができるじゃないですか。

坂之上：それに、働いて、職場で認められて、納税者になるって本人がいちばんうれしいことだと思います。

片岡：総社市では昨年、障がい者を含む 39 世帯が就労によって生活保護を受けるのをやめて自立しました。

やっぱり、行政にかかわるみんなが不得意だと言っていることを、得意に変えていきたいという気持ちが当然あるし、この国の形を、地域が自立する形に変えていきたいと思っています。これは全国に横たわる課題なんです。

(構成：石川香苗子、撮影：梅谷秀司)